

「公事」部の展開

——『類題和歌集』の成立考——

三 村 晃 功

一 はじめに

筆者は、さきに「『公事』部の誕生——『題林愚抄』の成立考——」（『中世文学研究』第十八号、平成四・八）なる論考で、勅撰集や私撰集の部立構成をみると、その歌題の配列・展開を組織化する統一原理として、一年を単位として展開する暦や年中行事などに認められる自然の摂理に基づく方法が援用され、その方法は勅撰集や私撰集の部立構成面で多大な役割を担っていると推測されるが、残念ながら、それ自身が独立した「年中行事」や「公事」なる部立を獲得するまでには至らず、「公事」部の誕生は類題和歌集『題林愚抄』の出現を待たねばならなかった経緯を考察し、「公事」部の誕生面で『題林愚抄』が果たした意義の大きさに言及した。そして、「公事」部の史的展開を考察するには、後水尾院撰『類題和歌集』の存在がはなはだ大きいと判断されるゆえに、「また、『明題和歌全集』の公事部は『題林愚抄』のそれに依拠しているので、内容的にはまったく異ならないが、後水尾院撰『類題和歌集』の公事部は『題林愚抄』を基幹にして、さらに各種の歌集を参照して充実した内容になっている。したがって、『題

『林愚抄』と『類題和歌集』との比較、検討の問題が今後の課題として残るといわねばなるまい」と、言い添えたのであった。

このような次第で、『題林愚抄』と『類題和歌集』（以後『類題集』と略称する）とを比較・検討してみる必要性は多大であつて、この視点から、両者を比較してみると、『類題集』の「重陽」と「重陽宴」の歌群に両者の異同が集約的に認められるように憶測されるので、次に『類題集』から当該箇所を引用すると、以下のとおりである。

- (1) ゆくすゑの秋をかさねて九重に千代までめぐれきくの盃
(重陽・続千載・新院別当典侍・二五二)
- (2) 紫につらなる袖やうつるらん雲のうへにてにほふしらぎく
(重陽宴・玉葉・常盤井入道前太政大臣〈実氏〉・二五三)
- (3) もゝしきの大宮人のけふといへばかざしにさせる千代の白菊
(同・同・兵部卿隆親・二五四、(13)に同じ)
- (4) 長月の菊の盃九重にいくめぐりとも秋はかざらじ
(同・風七・山階入道左大臣〈実雄〉・二五五、(15)に同じ)
- (5) 九重に千代をかさねてかざす哉けふ折えたるしら菊の花(同・同・冷泉前太政大臣〈公相〉・二五六、(14)に同じ)
- (6) めぐりあふ月日もおなじ九重にかさねてみゆる千世の白菊
(同・同・藤原隆祐朝臣・二五七、(19)に同じ)
- (7) もろ人のけふ九重にほふてふ菊にみがけるつゆのことの葉
(同・新拾五・前大納言為家・二五八)
- (8) 百敷や袖をつらぬる諸人のとる手もにほふきくのさかづき
(同・新葉・権中納言・長賢・二五九)
- (9) 九重のとのへもにはふ菊のえにことばの露もひかりそへつ、
(同・拾遺愚草中・〈定家〉・二六〇)
- (10) こゝのへのちとせのかめにさすきくの匂ひもふかしかけることのは(同・玉吟下・〈家隆〉・二六一、(27)に同じ)
- (11) いくめぐりかざらぬとしをつむ菊のかずさへみゆるけふのさかづき
(同・宝治御百首・御製〈後嵯峨院〉・二六二)

- (12) こゝのへに千世やかさねん乙女子が袖にまがへるしら菊の花
(同・同・前内大臣〈基家〉・二六三)
- (13) 百敷の大宮人のけふといへばかざしにさせるしらぎくの花
(同・同・隆親卿・二六四、(3)に同じ)
- (14) 九重にちよをかさねてかざすかなけふおり得たるしら菊の花
(同・同・公相卿・二六五、(5)に同じ)
- (15) なが月の菊のさかづき九重にいくめぐりとも秋はかぎらじ
(同・同・実雄卿・二六六、(4)に同じ)
- (16) なが月やけふ折る菊の花の枝に万代ちぎるくものうへ人
(同・同・行家卿・二六七)
- (17) わが君の代をなが月によるひをはけふ白菊の花にまがひぬ
(同・同・真観〈光俊〉・二六八)
- (18) めぐりあはん秋もかぎらじ雲のうへに千世さきそふる菊の盃
(同・同・按察・二六九)
- (19) めぐりあふ月日もおなじ九重にかさねてみゆる千世のしら菊
(同・同・隆祐・二七〇、(6)に同じ)
- (20) から国のことのはしげくひゞく也けふをまちける九重のきく
(同・同・忠定卿・二七一)
- (21) 九重にかさねてにほへ乙女子が立まふ袖にまがふしら菊
(同・同・資季卿・二七二)
- (22) 折えたる菊の白露さか月にくみてつきせぬ御代は見えけり
(同・同・有教卿・二七三)
- (23) さかづきのかけさしそへてみつる哉雲のうへなる白ぎくの花
(同・同・師継卿・二七四)
- (24) 百敷や秋のいくとせふりぬらんけふさく菊の露のことのは
(同・同・蓮性〈知家〉・二七五)
- (25) 九重に久しくめぐるもろ人の老せぬ秋のきくのかさづき
(同・同・為氏朝臣・二七六)
- (26) つらなれる星の位もみゆるかな秋の雲井のきくのかざしは
(同・已上同・少将典侍・二七七)
- (27) 九重のちとせのかめにさすきくのにほひもふかしかける言のは
(同・御屏風・家隆・二七八、(10)に同じ)
- (28) 九重の菊のさかづきいましはや絶にし跡にめぐりあはなん
(同・元弘立后屏風・御製〈後醍醐院〉・二七九)
- (29) 君ぞ見んことばの露をかさねても笹の菊のぬれてほすまは
(同・同・中務卿親王〈尊良親王〉・二八〇)

- (30) もろこしの風をつたへて九重に匂ひそめにしけふのしら菊 (同・同・三条内大臣〈実忠〉・二八二)
- (31) きく紅葉おりしくひを、とりそへてけふたまふなりみきの盃 (同・年中行事歌合・内大臣〈師良〉・二八二)
- (32) めぐれ猶雲井にとしをつむきくの花にうつろふけふのさかづき (同・〈雅世卿集〉・雅世・二八三)
- (33) 長月や見し影とをし九重の九日ごとのきくのさかづき (同・〈不明〉・基綱・二八四)
- (34) けふたまふ菊のさかづきさしくみてしらん千穂や雲の上人 (同・〈参議濟継集〉・為広・二八五)
- (35) 菊や今なべての花の七重八重九がさねをいろにさくらん (重陽・天文十二九九・公条・二八六)
- (36) 君が代のあきやいく秋きくの露けふの九の淵をかさねん (同・享禄二・同・二八七)
- (37) おらでみんけふの雲井の盃にひかりさしそふ菊の上の露 (同・〈不明〉・実世・二八八)
- 以上の三十七首をみると、『類題集』は、歌題面で、(35)～(37)の「重陽」の題を、(1)に連続させればよいのに、「重陽宴」の後に配置したり、また、例歌の面で、(3)∥(13)、(4)∥(15)、(5)∥(14)、(6)∥(19)、(10)∥(27)の五首を重出させたりする不備を有する一方、『題林愚抄』には収載しない例歌を、十首も増補して、より完全な「公事」部にしようとする編者の意図も顕著に窺知されるのである。すなわち、『類題集』の(11)～(31)の二十一首が『題林愚抄』からの採録であることは、前引の拙稿「『公事』部の誕生」から明白であるが、(1)～(3)の例歌は『明題和歌全集』の「秋部下」からの抄出歌であり、また、(4)～(7)の四首は『続五明題和歌集』からの収載歌であり、また、(8)は『新葉和歌集』から、(9)は『拾遺愚草』から、(10)は『玉吟集』(27と重出するが)から、(32)～(34)・(37)の四首は出典不詳(前三首は「毎日一首」か)、(35)は「天文十二年九月九日会」から、(36)は「享禄二年会」から、各々、収録されているわけである。なぜなら、(1)の詠は『題林愚抄』にも収載されるが、その題は「重陽宴」であるし、また、(7)の詠も『題林愚抄』に収録され、あるいは『題林愚抄』から採歌された可能性もなしとしないが、(7)と(11)の詠の間が三首も離れている

ことと、(4)～(7)の例歌が『続五明題和歌集』に一括して連続する歌群であることから考えて、前述の類題集から抄出されたと推測するほうが妥当性を有するからである。

ここに、『題林愚抄』に依拠しながらも、さらに例歌の収録面でより完備した「公事」部を編纂しようと企図した『類題集』の編纂目的を指摘することができ、換言すれば、『類題集』が「公事」部のうえで、『題林愚抄』を出発点にして、さらに発展・展開している史的役割を担っている作品と認め得るのである。したがって、「公事」部の究明には『類題集』の「公事」部の検討は不可欠の課題であると言わねばならず、はたして『類題集』の「公事」部は全体ではどのような内容になっているのであろうか。以下、この点について、もう少し掘り下げて追究してみたいと思う。

二 『類題集』の「公事」部の歌題

それでは、『類題集』の「公事」部には、どのような歌題がどのように配列されているのであろうか。次の(表1)は、その実態を明らかにすべく、『類題集』の「公事」部の歌題のすべてを、『題林愚抄』のそれと比較・対照しながら、いくつかの注を付したものである。

(表1) 『類題集』の「公事」部の歌題一覧表

番号	A	備考	B	C
1	四方拝	一月1日	1	季一月1
2	供屠蘇白散	同	2	元日
3	朝拝(賀)	同	4	6
4	小朝拝	同	3	2

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
曲水宴	三月三日	祈年祭	大原野祭	*春日祭社頭儀	春日祭	外記政始	内宴	賭弓	踏歌節会	*踏歌の心を	御薪	*除目	県召除目	女叙位	御齋会	白馬節会	告朔	臨時客	卯杖	*献若菜	若水	腹赤御贄	氷様	元日宴	*小朝拝列立の所
同	三月三日	4日	上卯日	同	二月上申日	是月	21日	18日	同	14・16日	15日	同	11・13日	8日	8・12日	7日	同	2日	上卯日	上子日	立春の朝	同	同	同	同
20		19	11			18	17	16	15		14	13		12	9	10	7	8			6	5			
36	35	四月 34	31	30	三月 29	28	27	二月 25	24	23	22	21	19	17	15	16	13	11	14	12	9	8	7	4	3

56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
秋奠	祈年穀奉幣	相撲	盂蘭盆	乞巧奠	広瀬龍田祭	施米	大祓	神今食	月次祭	献醴酒	賑給	最勝講	騎射	武徳殿小正月	五日節会	三枝祭	*神祭	賀茂祭	灌仏	梅宮祭	松尾祭	平野祭	大神祭	*旬	石清水臨時祭
八月上丁日	是月	是月	15日	7日	七月4日	是月	晦日	同	11日	六月	同	是月	3 6日	同	五月5日	?	同	中西日	8日	上酉日	同	上申日	上卯日	四月1日	中午日
42	40	39	38	37	36	34	35	65	64	33	32	31	30		29	28		27	26	24	23	22	25	21	
73	69	60	72	59	70	57	56	八月58	55	54	53	51	七月52	49	48	50	六月46	45	44	43	38	五月41	40	37	33

82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	
撰虫	例幣	重陽宴	*重陽	*九月九日	不堪田奏	御燈	季御読経	上野駒引	信濃勅旨駒引	武蔵駒牽	*牽穂坂御馬	甲斐駒牽	駒牽	*逢坂関駒迎行向所	*関路駒迎	*関駒迎	*雨中駒迎	*深更駒迎	*深夜駒迎	*夜半駒迎	*駒迎	放生会	定考	北野祭	献胙	
秋	11日	同	同	9日	7日	九月3日	是月	28日	15日	25日	同	17日	同	同	同	同	同	同	同	同	16日	15日	11日	4日	是月	
55	54	53			52	51	50	49	48	46		44											47	45	41	43
雑 124	111	110	109	107	47	十二月 91	117	96	89	103	102	100	十一月 99	87	競馬	85	84	十月 83	82	81	77	80	九月 76	75	74	

107	106	105	104	103	102		101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	
内侍所御神楽	除夜仏名	禁中仏名	仏名	還立御神楽	臨時祭（賀茂）	上社	*賀茂臨時祭社頭儀式	賀茂臨時祭	吉田祭	*豊明節会	*新嘗祭	新嘗会	*五節舞姫	*五節参入の所	*五節舞姫	*五節	野行幸	*初雪見参	大乘会	*残菊宴	維摩会	射場始	*弓場始	旬	十月更衣	
是月	同	同	十二月19 ～ 21日	同	同		同	下西日	中申日	中辰日	同	中卯日	同	同	同	中丑 ～ 辰日	同	十一月	24 ～ 28日	5日	10日	同	5日	同	十月1日	
66			67					63	59	62		61				60					58	57			56	
										遣唐使餞	136	127	129	126	125	114	116	115	118	128	113	130	122	120	119	123

133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108							
*遊宴	*庚申	*産七夜	七夜	奏慶	天文奏	輦車	牛車	恩赦	宣命	詔書	御賀	*元服	御元服	行幸	仁王会	大嘗会	止雨	祈雨	封事	万機旬	*公事	追儼	節折	荷前	内侍所御神樂儀式							
																										同	晦日	同	同			
																														70	69	68
97			98			91	99	96	95	86	87	90	89		88	十一月中卯日 三月・七月			93			92	94									

136	135	134
* 宴遊 * 宴遊待曉 大唐商客		
100		

なお、(表1)の略号のうち、「A」は『類題集』、「B」は『年中行事歌合』、「C」は『題林愚抄』を意味し、「A」欄の歌題に付した「*」は『題林愚抄』には所収せず、『類題集』にのみ掲げる歌題であることを意味するが、「B」欄の数字は『年中行事歌合』の番号、「C」欄の番号は『類題集』(表1)の「番号」欄のそれである。

さて、この(表1)から、『類題集』と『題林愚抄』との「公事」題収載状況を比較してみると、『題林愚抄』が収載しない題を『類題集』が四十題有しているのに対し、『類題集』が収載しない題を『題林愚抄』が有している場合は三題にしか過ぎないことが知られる。すなわち、『類題集』のみが収載する歌題は、「小朝拝列立の所」「献若菜」「除目」「踏歌の心を」(以上、一月)、「春日祭社頭儀」(二月)、「旬」「神祭」(以上、四月)、「武徳殿小正月」(五月)、「駒迎」「夜半駒迎」「深夜駒迎」「深更駒迎」「雨中駒迎」「関駒迎」「関路駒迎」「逢坂関駒迎行向所」「牽穂坂御馬」(以上、八月)、「九月九日」「重陽」(九月)、「弓場始」「残菊宴」「初雪見参」(以上、十月)、「五節」「五節舞姫」「五節参入の所」「五節舞姫」(重複)、「新嘗祭」「豊明節会」「賀茂臨時祭社頭儀式上社」(以上、十一月)、「仏名」「禁中仏名」「除夜仏名」「内侍所御神楽」(以上、十二月)、「公事」「元服」「産七夜」「庚申」「遊宴」「宴遊」「宴遊」「宴遊待曉」(以上、雑の公事)のとおりであり、逆に、『題林愚抄』のみが収載する題は、「元日」(一月)、「競馬」(十月)、「遣唐使餞」(雑の公事)のごとくである。ここには関係する歌題はすべて収録しようとする『類題集』の編纂姿勢が如実に窺知されるが、その点について、具体的に言及してみよう。

まず、六月と十二月の十一日に神祇官で行われた「月次祭」の題を、『類題集』は六月の行事に配置するのに対

し、『題林愚抄』は十二月の行事に配置している点や、「野行幸」の題を、前者が十一月の行事にしているのに対し、後者は十二月の行事として扱っている点などには、両類題集の独自の見解が示されていて興味深い。しかし、『題林愚抄』の「元日」の題を『類題集』が掲げていないのは「元日宴」があるので省略したのであるが、それならば、『類題集』の「重陽」「重陽宴」の場合も同様の処置をすればいいはずであろう。にもかかわらず、この場合は、『類題集』が両題とも掲げている基準からいえば、『類題集』がこの「元日」の題を所収していないのは『類題集』の手抜きとも言えるであろう。また、雑の公事題のうち、「遣唐使餞」の題を『類題集』が掲げていないのも、『類題集』の手落ちであろう。また、『類題集』が「五節舞姫」の題を重複して掲げているのは、『類題集』の軽率な編纂過程を示しているように。しかし、『題林愚抄』が十月の行事として掲げている「競馬」の題を『類題集』が所収していないのは、この「競馬」が五月五日に上賀茂神社の神事として行われる儀式であるからで、これは『類題集』の判断が正しいことを物語っているように。また、「十月廿四日より法勝寺にて法花講を五日の程おこなはる、事年々の公儀也」と、『類題法文和歌集注解 四』に説かれている「大乘会」の題を『題林愚抄』が十一月の行事としているのに対し、『類題集』が正しく十月の行事として把握しているのは、『類題集』の見識の高さを示している。

このように、『類題集』にも多少の欠点は指摘されないことはないが、次に、両類題集における歌題配列の問題に目を向けてみよう。まず、一月の行事については、「四方拝」から「腹赤御贄」までは一日の儀式だが、『類題集』の配列のほうが整然としているうえに、「踏歌の心」の題はともかく、「献若菜」「除目」の題を増補しているのは『類題集』の手柄であろう。また、二月の行事では「春日祭社頭儀」の題を、三月の行事では孟夏の「旬」の題を、五月の行事では「武徳殿小正月」の題を各々増補したうえに、四月では『題林愚抄』が五月の行事としている「賀茂祭」の題を四月の位置に正しく据えたり、同じく、四月の「大神祭」の題を『題林愚抄』が「松尾祭」

「梅宮祭」の題の後に配列しているのを「平野祭」の題の前に置き、整った年時配列に訂正している点には、「公事」部のより完全な部類を志向する『類題集』の編纂姿勢が窺えよう。このように正確な年時配列を志向して『題林愚抄』の不首尾な配列を訂正している事例は、七月の行事で、四日に行われる「広瀬龍田祭」の題を、『題林愚抄』が七日に行われる「乞巧奠」の題の後に配列している箇所や、八月の行事で、十六日に行われる「甲斐駒牽」「武蔵駒牽」の題を、『題林愚抄』が十一日の「定考」、十五日の「放生会」の題より前に配列している箇所や、九月の行事で、七日に行われる「不堪田奏」の題を、『題林愚抄』が「重陽宴」の後に配列している箇所などに各々指摘されるが、これらの『題林愚抄』の不首尾は『類題集』では訂正され、整然とした配列になっている。ちなみに、八月十六日の「駒牽」の馬を、役人が逢坂の関まで出迎えに行く「駒迎」「関駒迎」の題は、『題林愚抄』が「秋部二」に収載しているために、「公事」部には収録をみないのに対し、『類題集』が「駒迎」「夜半駒迎」「深夜駒迎」「深更駒迎」「雨中駒迎」「関駒迎」「関路駒迎」「逢坂関駒迎行向所」の歌題を「公事」部に収めているところには、『類題集』の「公事」に対する見方が窺われて興味深い。この点は、十一月の行事である「五節」「豊明節会」の題を、『題林愚抄』が「冬部下」に所収しているために「公事」部に掲げていないのに対して、『類題集』が「五節」「五節舞姫」「五節参入の所」「豊明節会」を「公事」部で扱っている姿勢に通底する考え方であろう。なお、『類題集』が十一月で、「新嘗祭」「賀茂臨時祭社頭儀式上社」の題を、十二月で、「仏名」「禁中仏名」「除夜仏名」「内侍所御神楽儀式」の題を、雑の公事題で、「公事」「産七夜」「庚申」「遊宴」「宴遊」「宴遊待暁」などの『題林愚抄』が有しない題として掲げているのは、これまた『類題集』が完璧な「公事」部の部類をめざそうと試みた証拠であろう。

以上、『類題集』と『題林愚抄』に収録する歌題について、おおまかではあるが検討を加えた結果、『類題集』の

編者は、依拠した撰集の根幹をなす『題林愚抄』に収録しない歌題については、『続五明題集』『明題和歌全集』などの類題集や、『拾遺愚草』『玉吟集』などの私家集などから増補する一方、歌題配列については、依拠した撰集資料に誤った歌題配列が認められる場合には、年中行事の行われた年時に従って、正確に配列しなおすなどして、より完璧な「公事」部の部類の達成に努めようとしたらしいことが明白になり、歌題面では、これらの点に『類題集』の特徴を認めることができると言えるであろう。

三 『類題集』の「公事」部の例歌

それでは、『類題集』は「公事」部に収載した歌題について、いかなる詠歌をその例歌にしているであろうか。この問題についても、『題林愚抄』との比較、検討をとおして明らかにしてみたいと思う。

まず、『類題集』が『題林愚抄』から採録していない例歌を調べてみると、わずか七首で、それは「元日」「卯杖」「石清水臨時祭」「競馬」の題の例歌である、

- (38) 庭もせにひきつらなれるもろ人の立ちゐるけふや千世の初春
(元日・玉葉散木・俊頼・九七〇四)
- (39) 万代の春のはじめのけふしよりつかへまつらんとしにありつつ
(同・堀川院第二百首・仲実・九七〇五)
- (40) 君がためけふの卯杖をつきもせずいくその春のものとかはみる
(卯杖・出典・作者不詳・九七二六)
- (41) 九重のさくらかざしてけふはまた神にむかふる雲のうへびと
(石清水臨時祭・新拾(新千載)・後醍醐院・九七六六)
- (42) 及びつる手はうちかけに見えながらつひにとられてにげぶちの駒(競馬・同(為忠後度百首)・為忠・九九〇一)
- (43) とほさじとおしこむれども過ぎぬるはひま行く駒の心ちこそすれ
(同・同・顕広・九九〇二)

(44) 駒のあしははやしと見るに負けぬるは人の心のおそきなるべし
 (38) (44)のとおりである。
 (同・同・頼政・九九〇三)

一方、『類題集』は、次の「石清水臨時祭」「旬」の例歌である、

(45) 年ごとに山あるの袖にひくこまのたえせぬけふの春の庭哉(石清水臨時祭・同(元弘三立后屏風)・家隆・九九)

(46) 冬のきてけふ玉しきの庭の面にたつことやすきしらかさね哉
 (旬・新千・御子左中納言・二九二)

(45)・(46)の詠歌を採録に際して、前者には『玉吟集』の「泥絵御屏風」の出典を、後者には『元弘三年立后屏風』の出典を、各々注記のごとく『題林愚抄』の誤ったままに踏襲している不備が少々指摘されるものの、そのほとんどは、次の事例に見られるように、正しく訂正して掲げているのである。すなわち、歌題面では、『題林愚抄』が、

(47) 八隅しる君がおさむるあがためし恵みにあへる名社聞ゆれ
 (除目・年中行事歌合・新中納言為秀・三四)

(47)の歌題を「県召除目」とするのを、『類題集』は出典の注記のごとく「除目」と訂正しているし、また、詠歌作者面では、『題林愚抄』が、次の

(48) 山あるの袖になれにし桜花はるのかざしは猶ぞ忘れぬ
 (石清水臨時祭・禅林寺殿七百首・雅言・一〇一)

(49) おさまれる時にあふみのやす川は幾度御代にすまんとすらん
 (大嘗会・同(続古今)・宮内卿永範・三九七)

(48)・(49)の作者名を、前者は「雅定」、後者は「範永」と誤記しているのに、『類題集』は注記のとおり、「雅言」、「範永」と訂正しているし、また、例歌の面では、『題林愚抄』が「外記政始」の例歌として、『新葉集』の題知らずの「権中納言経高母」の

(50) あしびたき冬ごもりせし難波めも今は春べとわかなつむなり
 (新葉集・題しらず・権中納言経高母・一〇一六)

(50)の詠を誤って掲げているのに、『類題集』は、(50)の歌を差し替えて、

(51) 雲のうへおさまる春のまつりごといでたつ庭にまづしられつ、
のごとく適切な(51)の例歌を掲示しているごとくである。

(外記政始・新葉・前大納言実為・五四)

このように『類題集』が依拠した撰集資料の誤謬を正して掲載している事例はそのほかにも指摘し得るが、それ以上に特筆すべき特徴は、『類題集』が当該歌題の例歌をかなり大量に増補している実態である。この点には、『類題集』の編者のより完璧な「公事」部の完成をめざそうとする編纂意図が如実に表れているようが、ここに『類題集』が新しく増補した例歌を、「残菊宴」と「産七夜」の歌題のみ提示して例歌を欠く場合を除いて掲げるならば、実質次の百五十三首となる。

- (52) たかみくらとばかりか、げてかしはらの宮のむかしもしるき春哉
(53) 霞しく春のはじめの庭の面にまづたちわたる雲の上人
(54) 立そむる春のひかりとみゆる哉星をつらぬる雲の上人

(朝拝・新葉・後村上院御製・三)

(小朝拝列立の所・拾遺愚中・〈定家〉・九)

(元日宴・風〈雅〉・後法性寺入道前関白太政大臣〈兼実〉・一二)

- (55) もろ人のめぐみへだてぬ道しあれや春立けふの門ひらく声

(同・雪玉永正三四・逍遙〈院〉・一七)

- (56) 千世までの春をつみてや君がためけふたてまつる若な成らん

(献若菜・新葉・前内大臣隆〈俊〉・二一)

- (57) 紫のあけも緑もうれしきは春の初にきたる也けり

(臨時客・同〈後拾遺〉・藤原輔尹朝臣・二五)

- (58) 春はまづくる諸人の代々をへてうたふもたえぬ青柳の糸

(同・新葉・後村上院・二六)

- (59) たはれおが声もふけぬる竹河の水むまやには影もとまらじ

(踏哥の心を・〈夫木〉・光明峰寺入道〈道家〉・三六)

- (60) 春の夜のくものかよひぢおりはへて月の雪ふむ天津乙女子

(踏哥節会・家集・為家・三八)

- (61) けふは我きみの御前にとるふみのさしてかたよる梓弓かな

(賭弓・六百番哥合・女房〈良経〉・三九)

- (62) 梓弓ひくればかりはよ所なれど心にいるは雲の上人
(同・同・寂蓮法師・四〇)
- (63) あづさ弓春の雲井もひゞくまでともねにかよふまどの音哉
(同・兼宗朝臣・四一)
- (64) 百敷にひきつらなれる梓弓春もともねのめづらしき哉
(同・季経卿・四二)
- (65) あづさ弓ゐてひく春のかひありてけふのもろ矢はよにひゞく也
(同・顯昭・四三)
- (66) 梓弓はる九重にちる雪をけふたつ舞の袖にみる哉
(同・信定〔慈円〕・四四)
- (67) 百敷やいてひく庭のあづさ弓むかしに帰る春にあふかな
(同・定家・四五)
- (68) 梓弓春の雲井にひきつれて気色ことなるけふの諸人
(同・已上同・家隆・四六)
- (69) あづさ弓春立くれば百敷の大宮人ぞまとゐせりける
(同・家集・為家・四七)
- (70) 梓弓居待の月もいでにけりちかきまもりや引わかるらん
(同・享徳十八・雅親・四九)
- (71) あづさ弓けふはひくても舞の手もひだり右にぞあかず暮ぬる
(同・毎日一首・称名院公条・五〇)
- (72) 梓弓はるのまとゐを雲のうへのけふの^{にイ}とも音のひゞきにぞ聞
(同・同・三光院実世・五一)
- (73) わぎも子がたちまふ花の袖の色を心につくる人の言のは
(内宴・家集・為家・五二)
- (74) 雲のうへおさまる春のまつりごといでたつ庭にまづしられつ、
(外記政始・新葉・新大納言実為・五四)
- (75) みかさ山さしけるつかひけふくればすきまにみゆる袖の色く
(春日祭社頭儀・拾遺愚草中・定家・六七)
- (76) 春をへて水上とをくなり^にけりながれもうかぶ花のさかづき
(三月三日・草庵・〔頼阿〕・八〇)
- (77) 言のはの文字もいく世か行水にめぐりきぬらん花のさかづき
(同・千首・師兼・八一)
- (78) あひにあひて空も花にや酔のうちのひかりさしそふ春の盃
(同・毎日一首・堯空〔実隆〕・八二)
- (79) なべてけふ花咲桃のくれなるにふむ跡あをきのべの遠近
(同・同・公条・八三)

- (80) けふといへば物いはぬ花も三日月の光に千世の色やそふらん
(同・同・実世・八四)
- (81) 石まゆく花の盃までしばしまだことのははかきもながさず
(曲水宴・草庵・〈頓阿〉・八七)
- (82) 神さびて猶やさしきはもろ人のあさくらかへす春の明ほの
(石清水臨時祭・〈家集〉・忠度・一〇〇)
- (83) あふひ草神もあはれはかけそへよ所にみあれのかものみづがき
(賀茂祭・新葉・後村上院御製・一〇八)
- (84) 偽をたゞすの宮の神ならばけふのみあれに君忍ぶらし
(同・千首・師兼・一二七)
- (85) 小車のふたつの輪だちもろかづらくるみあれば所せきまで
(同・享徳二十八・持為・一二九)
- (86) めぐみある神と君とのもろ心もろかづらにぞかけてみえける
(同・〈垂槐集〉・雅親卿・一三〇)
- (87) もろかづら千はやぶるてふかざしもの万代かけていのるけふかな
(同・百首〈雪玉集〉・〈実隆〉・一三一)
- (88) 神まつるけふはいくそのかけをかはみたらし川のゆき、成らん
(同・〈毎月一首〉・堯空〈実隆〉・一三二)
- (89) ところせくたつるみてぐらかざり馬神もやいさむかものみづがき
(同・〈同〉・公条・一三三)
- (90) 神がきに行末遠しあふひ草いく世かけても同じ二葉は
(同・〈三光院詠〉・実世・一三四)
- (91) めづらしきかりねののべの露けさをけふはあふひのうへにみせけり
(神祭・千首・称名院前内大臣〈公条〉・一三五)
- (92) 花の色をさ月の玉にぬきとめてわか^{あい}ずをとめの姿をぞみる
(武徳殿小五月・家集・為家・一三八)
- (93) あまくだる跡しきしのべ雲の上に今も五月の法の庭は
(最勝講・百首〈雪玉集〉・逍遙院〈実隆〉・一四八)
- (94) ゆふかけてつかひもけふぞたつた山やまぢをとをみよるやこゆらん
(広瀬龍田祭・新葉・妙光寺内大臣〈家賢〉・一五九)
- (95) うたふよの星にはあらで織姫の手向の庭火かげぞ更ゆく
(乞巧奠・〈不明〉・親王御方・一八二)

- (96) けふといへばことぢたてかへをくことのひかぬ手向も星やうくらん
(同・〈不明〉・基綱・一八三)
- (97) なき人の此世にかへるおもかげのあはれ更行秋のとし火
(孟蘭盆・家集・隆祐・一八四)
- (98) 世中にすまふとすれど猶ぞふるおもひとられぬ心よはさは
(相撲・明日香井集上・雅経・一八六)
- (99) みこしをさの声さきだて、くだりますをとかしこまる神の宮人
(放生会・山家集下・〈西行〉・一九八)
- (100) 此神のいけるをはなつ川のせにやどる最中の月ものこして
(同・寛正四・雅行・一九九)
- (101) 今もかも絶せぬ物か年ごとの秋のなかばのもち月のこま
(駒迎・風雅十五・権中納言国信・二一〇)
- (102) 道すがらゆきあふ坂の旅人にこまのたちどをとひつゝぞ行
(同・散木奇歌集・俊頼・二二二)
- (103) はしり井のかけひのきりはたなびけどのどかに過る望月の駒
(同・同・同・二二三)
- (104) こよひとて月はさやけきあふさかに雲の上人こまむかふなり
(同・玉吟上・家隆・二二四)
- (105) またれつる関の水かふほどなれや大宮人にもち月のこま
(同・家集・隆祐・二二五)
- (106) あづまより秋はみやこの雲井までたな引のぼるきり原の駒
(同・〈同〉・雅有・二二六)
- (107) あづまより今や引らんくもりなき御代のためしのもち月の駒
(同・信太杜〈千首〉・〈宗良親王〉・二二七)
- (108) 引かへて関の戸さ、ぬ君が代にいつあふさかのもち月のこま
(同・千首・耕雲・二二八)
- (109) けふは又雲井の庭の引わけに逢坂いそげ望月の駒
(同・同・為尹・二二九)
- (110) もち月のかげを都にまづみせて駒ひきのぼるあふ坂の関
(同・千首・宋雅・二三〇)
- (111) あひにあひてそらの光もくもりなきためしにひくや望月の駒
(同・〈雪玉集〉・逍遙院〈実隆〉・二三一)
- (112) きりはらもち野もいはず雲のうへにいでゝはへある望月の駒
(同・百類本〈基綱集〉・基綱・二三二)
- (113) 神がきに年ふる駒もむかへてしそのもち月の秋は忘れじ
(同・千首・称名〈院〉前内大臣〈公条〉・二三三)

- (114) 引駒のかげこそみえねあふ坂の中空にすむ月のひかりに
(夜半駒引・拾玉集・慈鎮・二二四)
- (115) 出てこしあづまのかたは雲るぢにさ夜更けりな望月の駒
(深夜駒迎・雪玉集・逍遙院(実隆)・二二五)
- (116) いで、こし山とをかれや引分る雲井よふかきもち月の駒
(深更駒迎・同・同・二二六)
- (117) かきくもり相坂山にしぐれしてさやかに見えぬ望月の駒
(雨中駒迎・明日香井集下・雅経・二二七)
- (118) いつよりかたえぬためしにあふ坂の関のこなたに駒むかへせし
(関駒迎・禅林寺殿七百首・具氏朝臣・二二九)
- (119) 関越てけふや都に出ぬらんうら山しきはもち月のこま^{成イ}
(同・千首・師兼卿・二三〇)
- (120) ゆきなづむ駒ひきとめてあふ坂のせきのをがはにしばし水かへ
(関路駒迎・明日香井集下・雅経・二三一)
- (121) 関水の影もさやかにみゆるかなにぎりなきよの望月の駒(逢坂関駒迎行向所・拾遺愚(草)中・定家)・二三二
- (122) 秋の田のほさかの駒を引つれておさまれる世のかひも有けれ
(牽穂坂御馬・新葉・後村上院御製・二三八)
- (123) 長月やけふしる月も光そへて星にたむくる夜はのともし火
(御燈・新葉・後村上院御製・二四三)
- (124) にぎはへる民のけぶりの秋をみんたかきにのぼる今日を待らん
(九月九日・続撰吟・享禄二・逍遙院(実隆)・二四六)
- (125) 敷島のやまとはあらぬことのはをけふはた菊の露にみがきて
(同・百首・永正二九(雪玉集)・同・二四七)
- (126) 天津星のひかりにちかき山高みのぼりてむかふ菊の盃
(同・不明)・公条・二四八)
- (127) 下露の淵となるまで君が代をけふしらぎくの花に契らん
(同・三光院詠)・実世・二四九)
- (128) うつろふにたねやはかはるひと花も色の千草の秋のしら菊
(同・天文十二九九(三光院詠)・同・二五〇)
- (129) 咲きくのいろをつくせるまがきには野べの千種の花もをよばじ
(同・同・雅綱・二五一)
- (130) 百敷や神をつらぬる諸人のとる手もにはふきくのさかづき
(重陽宴・新葉・権中納言長賢・二五九)

- (131) 九重のとのへもにほふ菊のえにことばの露もひかりそへつ、
 (同・拾遺愚草中・〈定家〉・二六〇)
- (132) こゝのへのちとせのかめにさすきくの匂ひもふかしかけることのは
 (同・玉吟下・〈家隆〉・二六一)
- (133) めぐれ猶雲井にとしをつむきくの花にうつろふけふのさかづき
 (同・〈雅世卿集〉・雅世・二八三)
- (134) 長月や見し影とをし九重の九日ごとのきくのさかづき
 (同・〈不明〉・基綱・二八四)
- (135) けふたまふ菊のさか月さしくみてしらん千穂や雲の上人
 (同・〈参議濟継集〉・為広・二八五)
- (136) 菊や今なべての花の七重八重九がさねのいろにさくらん
 (重陽・天文十二九・公条・二八六)
- (137) 君が代のあきやいく秋きくの露けふの九の淵をかさねん
 (同・享祿二・同・二八七)
- (138) おらでみんけふの雲井の盃にひかりさしそふ菊の上の露
 (同・〈三光院詠〉・実世・二八八)
- (139) こゝろひくまゆみつき弓おきふしにかつかたしるき雲の上人
 (弓場始・家集・為家・二九五)
- (140) 名をとへばつかさくも心して雲井にしるき今朝のはつ雪
 (初雪見参・新葉・後村上院御製・三〇四)
- (141) みゆきせし昔の跡の名残とていまもかひある千代のふるみち
 (野行幸・〈白川殿七百首〉・為教・三二三)
- (142) 年つもる御ゆきの跡も遠きよの名に聞わたるせり川の水
 (同・〈雅世卿集〉・雅世・三二四)
- (143) 芹川のながれて絶し昔だにまれの御幸の跡をとひけん
 (同・〈雪玉集〉・堯空・〈実隆〉・三二五)
- (144) たまさかのみゆきはしるや村鳥のかけをならびの岡の池水
 (同・〈不明〉・公条・三二六)
- (145) さがの山けふのみゆきのおりにあひてあられも草の玉やしぐらん
 (同・〈三光院詠〉・三二七)
- (146) 立いづる乙女のすがたあらはれて月にたどらぬ雲のかよひ路
 (五節・年中行事歌合・経賢僧都・三二六)
- (147) をとめ子がすがたもよそになりにけり豊明に影さゝぬ身は
 (五節舞姫・拾玉集一・慈鎮・三二七)
- (148) 白妙のあまのは衣つらねきて乙女待とる雲のかよひぢ
 (五節参入の所・拾遺愚草中・〈定家〉・三三八)

- (149) 乙女子がかへす袂やしるかりしよしの、宮のふかきためしも
(五節舞姫・続撰吟・公条・三二九)
- (150) みの山の白玉椿いつよりかとよのあかりにあひはじめけん (豊明節会・続後撰・太上天皇〈後嵯峨院〉・三四〇)
- (151) 山あるの宮をかさぬるこよひだにおほみの袖やかはらざるらん
(同・新葉・従三位国量・三四一)
- (152) をみ衣けふきてかざす日かげ草豊の明りの名こそしるけれ
(同・家集下・為家・三四二)
- (153) 世々をへておもへば久し乙女子が豊のあかりの雲のかよひ路
(同・石間集六・前大納言為氏・三四三)
- (154) 神まつるとよのあかりのをみ衣あかぬ恨を身にやのこさん
(同・千首・師兼卿・三四四)
- (155) 新嘗や昨日のはつほおさめ置てけふみき給ふ雲のうへ人
(同・年中行事歌合・蒔堅・三四五)
- (156) 月雪の光にしるき雲の上にをみの衣の袖かへすみゆ
(同・百類本〈文明九年五月七日大神宮法楽百首続哥〉・為富・三四六)
- (157) 山藍の袖は霜夜の月までもとよの明りの光とぞなる
(同・〈不明〉・後柏原院・三四七)
- (158) 絶きつるとよのあかりもかひなきやわが世にくらき舞姫の袖
(同・〈同〉・同・三四八)
- (159) たちいづる大歌人も舞ひめも袖やはさむきみき給ふ庭
(同・〈同〉・同・三四九)
- (160) 忘れめや豊の明の月かげに今はめなれぬをみのころも手
(同・明応四十八侍従大納言点・御製〈後土御門天皇〉・三五〇)
- (161) 君が代にはじめてかへす乙女子がうらめづらしき袖をこそ見め
(同・文龜元閏六〈雪玉集〉・逍遙院〈実隆〉・三五二)
- (162) 今朝のまの日かげの糸に霜さえて庭火もしろきをみの衣手
(同・水無瀬法楽・基綱・三五二)
- (163) 月雪のとよのあかりや糸竹も節に会たるしらべそふらん
(同・〈参議濟継集〉・為広・三五三)

(164) 世にたえぬみよのあかりの心葉にかくる火かげのいともかしこき (同・文明十四・同・三五四)

(165) ふる袖はみたらし川に影さえてそらにぞすめるうどはまの声

(賀茂臨時祭社頭儀式上社・拾遺愚草中・〈定家〉・三六〇)

(166) つかへこしちかきまもりのかへなしも身のいにしへになるぞ恋しき

(仏名・公事五十番歌合・女房〈良基〉・三六七)

(167) こゑぐに雲の上人きこゆ也ほとけの御名はつくすのみかは (禁中仏名・明日香井集下・雅経・三六八)

(168) しづかにぞ三世の仏の御名をきくこよひかぎりのことしなれ共 (除夜仏名・拾玉集一・慈鎮・三六九)

(169) 空さえてまだ霜ふかき明がたにあか星うたふ雲の上人 (内侍所御神楽儀式・拾遺愚草中・〈定家〉・三七二)

(170) 雲のうへにこれや春たつしるしなる袖をつらなるけふのもろ人 (公事・御集・後鳥羽院御製・三七五)

(171) 逢坂の山たちいで、雲のうへにかけさしのぼる望月の駒 (同・同・同・三七六)

(172) 天津風雲井の空を吹からに乙女の袖にやどる月かけ (同・同・同・三七七)

(173) もろ人のみたらし川にするが舞雲ゐに帰るあかつきの声 (同・同・同・三七八)

(174) としのくれ三世の仏の御名を聞て心はれ行雲のかよひ路 (同・已上同・同・三七九)

(175) あし毛なる馬ひくけふのわかなにはとねりめすこそたより也けれ (同・拾玉集三・慈鎮・三八〇)

(176) 百敷やかものみあれのしめのうちに仏の身をも猶すゝぐ哉 (同・同・同・三八一)

(177) あふさかのけふくる雲の上人は月にのりてぞ駒をむかふる (同・同・同・三八二)

(178) 雲のうへはかざしの花に雪ちりてかもの川せに月ぞさやけき (同・同・同・三八三)

(179) となふなる三世の仏の名の数をいく千とせまで君はかさねん (同・已上同・同・三八四)

- (180) けふにあふ雲ゐの庭のすまひ草とる手もあだにうつる物かは
(同・明日香井集上・雅経・三八五)
- (181) 春のあしたはこやの山のみぎりよりまづいはひたつ雲の上人
(同・同・同・三八六)
- (182) 君が代に雲のかよひ路空はれて乙女のすがた月にみるかな
(同・同・同・三八七)
- (183) あらたまの春をむかふる年のうちにおにこもれりとやらふ声く
(同・同・同・三八八)
- (184) 是も又千とせの秋のためし哉けふことにひくもち月の駒
(同・已上同・同・三八九)
- (185) をのづから手向る星もてりそひて紅葉にまじる峰のともし火
(同・続撰吟三・雅世・三九〇)
- (186) かゞみ山やまびこたかくよばふなりよのさかふべき影ぞみゆらし
(大嘗会・〈兼盛集〉・平兼盛・三九八)
- (187) うなひこがはなちのかみをとりたて、まきそめかねよふちせかはるな
(元服・散木集第九・〈俊頼〉・四〇二)
- (188) 出やらで猶ぞやすらふかのえさるあしわけ小舟こぎやかぬらん
(庚申・年中行事歌合・為邦朝臣・四一五)
- (189) 千世の春谷の戸いづる鶯のはつ音にぞひく二葉なる杉
(遊宴・御集・後鳥羽院・四一六)
- (190) 結びあぐるやどの泉の水さえて夏も夏なき物にぞ有ける
(同・同・同・四一七)
- (191) 秋の夜の月にぞうたふ舟の中浪のうへなるうからめの声
(同・同・同・四一八)
- (192) 雪ふかきあはづの原のくれがたはあはするたかも手にかへるなり
(同・同・同・四一九)
- (193) しき島ややまとことの葉かちまけに人の心ぞ人にこえぬる
(同・已上同・同・四二〇)
- (194) いと竹の千代のしらべも忘れずよ君がねがひの三の御舟に
(同・〈雅世卿集〉・雅世・四二一)
- (195) も、の花うかぶ心にまちぞみるあふむの月の石にさはるを
(宴遊・拾玉集三・慈鎮・四二二)
- (196) 心ありて苔むす岩をうちはらふ人のなさけに紅葉をぞみる
(同・同・同・四二三)
- (197) 庭の面の星となふる風の音に聞あはせてもとるひやうし哉
(同・同・同・四二四)

- (198) 秋のいねのおさまれる代のうれしきは春のあそびのまるこ弓まで
(同・同・〈同〉・四二五)
- (199) すみれつむ袖より袖をかざしきて野をなつかしみひとよのみかは
(同・明日香井集上・雅経・四二六)
- (200) こゝやさはたなばたつめにやどかりしあまのかはらの夕ぐれの空
(同・同・〈同〉・四二七)
- (201) 紅葉を袖にこきいれてかへりけん人の心の色を見るかな
(同・〈同〉・四二八)
- (202) みかりせしのもりのかゝみたづねきてふりにしかげも見ちする
(同・〈同〉・四二九)
- (203) しほがまのいつかきにけんとはかりのそのことはに昔をぞしる
(同・已上同・〈同〉・四三〇)
- (204) もろ人の春のあそびのなごりより明なばおらん宿の梅がえ
(宴遊待曉・御集・順徳院・四三一)
- 以上、『類題集』の本文については、現時点では写本か板本による本文提供しかない実情もあって、『類題集』の「公事」部に関係する『題林愚抄』に未収載の歌百五十三首を紹介し、大方の参考に供したわけだが、この実態をみただけでも、『類題集』の編者の「公事」部編纂にかける意欲のほどが知られよう。

四 『類題集』の「公事」部の内容——原拠資料と詠歌作者

このように、和歌史において『類題集』の「公事」部の有する意義は少なくないと評価されるのだが、それでは、『類題集』の「公事」部に収載される例歌の出典および詠歌作者はいかなるものであろうか。

次頁に掲げる(表2)は、『類題集』の「公事」部に三首以上の収載をみる原拠資料を整理、一覧したものである。この(表2)によれば、二歌題の例歌を欠く場合を除いた『類題集』の「公事」部の収載歌四百三十首のうち、『類題集』が三首以上の例歌を収載する歌集からの採歌率は九十・七パーセントにまで達し、この実態から『類題集』の「公事」部のおおよその傾向は把握できようが、ちなみに、二首以下の原拠資料も掲げておくと、次のとお

(表2) 「公事」部に三首以上の収載歌がみえる原拠資料一覧表

歌集	歌数
年中行事歌合	八四首
永久百首	三八首
六百番歌合	二九首
宝治百首	二八首
元弘立后屏風和歌	二七首
新葉集	一七首
明日香井集	一四首
為忠家後度百首	一二首
拾玉集	一二首
白川殿七百首	一二首
雪玉集	一一首
後鳥羽院御集	一〇首
歌集	歌数
不明	九首
後拾遺集	七首
拾遺愚草	七首
三光院詠	七首
続古今集	六首
為家集	六首
風雅集	六首
新勅撰集	五首
玉吟集	四首
続後撰集	四首
玉葉集	四首
師兼千首	四首
歌集	歌数
散木奇歌集	三首
新古今集	三首
続拾遺集	三首
続千載集	三首
新千載集	三首
新続古今集	三首
雅世卿集	三首
続撰吟集	三首
毎日一首	三首
計	三九〇首

りである。

〔二首の収載歌が認められる原拠資料〕

隆祐集・続後拾遺集・草庵集・新拾遺集・参議濟繼集・大神宮法楽千首・天文十二年九月九日(和歌)

〔一首の収載歌が認められる原拠資料〕

兼盛集・拾遺集・金葉集・詞花集・忠度集・山家集・順徳院御集・石間集・隣女集・夫木抄・新後撰集・耕雲
千首・信太杜千首・為尹千首・宋雅千首・享徳二年十月八日(歌会)・寛正四(年歌会)・文明九年五月七日
大神宮法楽百首続歌・基綱集・文明十四(年歌会)・水無瀬法楽(和歌)・亜槐集・続亜槐集・明応四年十月
八日侍従大納言点(取和歌)・享禄二(年歌会)

ここに、『類題集』の「公事」部の出典資料の視点から、『類題集』の内容についての言及が可能になるが、この問題は『類題集』の「公事」部に認められる詠歌作者の実態とあわせて考察したいので、次に、『類題集』の「公事」部に三首以上の収載をみる歌人を整理、一覧したのが、(表3)である。

(表3) 「公事」部に三首以上の収載歌がみえる詠歌作者一覧表

詠歌作者歌数	
雅経	一四首
慈円	一三首
定家	一二首
実隆	一二首
後醍醐院	一首
後鳥羽院	一〇首
公条	一〇首
俊頼	九首
後村上院	九首
家隆	八首
為家	八首
良基	八首
後嵯峨院	七首
実世(枝)	七首
兼昌	六首
忠房	六首

詠歌作者歌数	
為秀	六首
頼阿	六首
源顕仲	五首
仲実	五首
常陸	五首
大進	五首
顕昭	五首
善成	五首
師良	五首
良冬	五首
為邦	五首
良経	四首
隆祐	四首
実雄	四首
為氏	四首
為定	四首

詠歌作者歌数	
忠嗣	四首
了俊	四首
宗時	四首
宗久	四首
師兼	四首
雅世	四首
基綱	四首
為経	三首
親隆	三首
有家	三首
寂蓮	三首
知家	三首
光俊	三首
公相	三首
行家	三首
家賢	三首

詠歌作者歌数	
尊良親王	三首
邦省親王	三首
公賢	三首
忠頼	三首
蘊堅	三首
師嗣	三首
経賢	三首
長綱	三首
宗信	三首
秀長	三首
後柏原院	三首
為広	三首
計	三二三首

この(表3)によると、『類題集』の「公事」部の例歌四百三十首のうち、三首以上の詠歌作者がしめる割合は七十四・〇パーセントに達するが、詠歌作者の場合も二首以下の歌人に言及しておくと、次のとおりである。

〔二首の例歌が収載される歌人〕

為尹・為盛・為忠・家尹・家持・家房・貫之・雅親・季経・兼実・兼宗・顕朝・公明・資季・師継・実為・実氏・嗣長・守長・俊成・忠定・道長・道平・頼乗・隆親・隆信

〔一首の例歌が収載される歌人〕

按察・為教・為富・永範・花園院・家良・雅縁・雅具・雅言・雅行・雅綱・雅有・龜山院・基忠・匡房・基良・義持・耕雲・公宗・後土御門院・公雄・国信・国量・具氏・惠慶・賢阿・兼熙・兼盛・源縁・西行・持為・実経・実兼・実忠・師重・俊成女・順徳院・少将内侍・小弁・新院別当典侍・親王御方・信実・成実・赤染衛門・宗尊親王・宗良親王・尊氏・仲正・忠度・長継・長賢・道家・読人不知・範永・輔尹・有教・頼政・隆経・良暹

この（表2）・（表3）から『類題集』の「公事」部の内容に言及するならば、第一に『年中行事歌合』からの収載歌が他を圧している実態であろう。これは『年中行事歌合』が『文治六年女御御入内屏風和歌』を発展させた、年中行事の屏風和歌としてはもっとも完備した作品であることを考えるならば、至極当然な現象かもしれないが、詠歌作者としては主催者の良基の詠が突出しているほかは、為秀・頼阿・善成・師良・良冬・為邦・忠嗣・了俊・宗時・宗久などが平均的に採られている。ちなみに、この歌合は貞治五年十二月二十二日に催行され、前年に催行された南朝の『年中行事三百六十首歌』からの影響が多分に認められるが、そのことと直接の関係はないけれども、建武の新政権の樹立に関連する措置として、後京極院禧子の死去に伴い、立后した新室町院殉子を祝って催された『元弘立后屏風和歌』からの採歌が多い点も、『類題集』の特徴と言えようか。この『元弘立后屏風和歌』からの作者では、後醍醐院が特にめだつなかで、尊良親王・邦省親王がそれに続いている。なお、南朝関係では、後醍醐

院の皇子の宗良親王の撰による『新葉集』からの抄出歌が多い点も『類題集』の特色といえるが、詠歌作者では、後村上院が突出し、家賢がそれに続いている。また、『師兼千首』もこの期のものである。

その第二の特徴は、『永久百首』からの抄出歌がめだつ点である。これは同百首が『堀河百首』の題を基盤としながらも、年中行事の組題などを有する比較的是やい時期に成立した定数歌であるからであろうが、詠歌作者では、俊頼を筆頭に、兼昌・忠房・源顕仲・仲実・常陸・大進が平均的に続いている。なお、この時期では、永久四年十二月二十日に成った『永久百首』のほか、鳥羽院の近臣であつた丹後守藤原為忠が縁故者や友人を集めて、保延二年ごろに催した『為忠家後度百首』からの入集がめだつのも『類題集』の特徴であるが、これは同百首が雑部にほとんど公事関係ともいえる題ばかりを掲載しているからであろうが、この百首からの入集歌人では、為経がめだつ程度である。

その第三の特徴は、『六百番歌合』からの入集率が高いことである。これは良経が出題した歌題が、四季部では『永久百首』の題と半数も共通するという『六百番歌合』の歌題面に窺われる特徴から明らかのように、同歌合が年中行事関係の題を多く収載しているからであろう。詠歌作者では、慈円・定家・家隆がめだち、顕昭・良経・有家・寂蓮などがそれに続いている。なお、この時期の出典としては、『明日香井集』『拾玉集』『後鳥羽院御集』『拾遺愚草』『玉吟集』などの私家集からの採録がめだつなかで、勅撰集『新古今集』からの収載歌が少ないのは意外である。

その第四の特徴は、後嵯峨院歌壇における産物である『宝治百首』からの入集がめだつことである。同百首からの採録は、わずかに「乞巧奠」「重陽宴」の二題の例歌ではあるが、詠歌作者に数多くの歌人を有するために、『類題集』の撰集対象になったのであろう。なお、この時期では、文永二年七月七日に後嵯峨院の仙洞御所で催行され

た『白河殿七百首』や、『続後撰集』『続古今集』などの勅撰集、私家集『為家集』からの抄出歌が目を引くが、詠歌作者では、為家・後嵯峨院・実雄・為氏・知家・光俊・公相・行家などがめだつ存在である。

その第五の特徴は、『雪玉集』『三光院詠』『雅世卿集』『続撰吟集』などの室町期からの抄出歌がかなり多数収載されていることである。『類題集』が三玉集からの詠歌を多量に収載していることは、撰者の後水尾院が三玉集をことさら尊崇していた事情から説明しえようが、「公事」部において、実隆の私家集からの採歌が圧倒的に多いのは、たとえば『三光院詠』に収載される実世（実枝）の詠が、「堯空」（実隆）「公条」などの詠歌と一括して「三月三日」の題の例歌になり、その集付に「毎日一首」とあることと関係があるように思量される。というのは、『三光院詠』の冒頭の端作りに「十五歳 実世 大永五年 自九月九日、終後十一月十九日」とあり、この記事が『類題集』の集付の「毎日一首」のことを意味しているからである。ちなみに、『類題集』から示唆される「毎日一首」を行っている歌人は上記の実枝・実隆・公条の三名であるようなので、これに関係する後柏原院、政為の詠歌は「公事」部にはみえないのであろう。なお、（表1）で「不明」とした出典の作者は、後柏原院・基綱・公条・親王御方・為尹などで、だいたいこの期の歌人である。この時期の詠歌作者では、実隆・公条を筆頭に、実枝・雅世・基綱・後柏原院などが続いている。なお、『類題集』の「公事」部の大半はこの時期の詠歌であって、その意味で、この期の詠歌の有する資料的価値はけっして少なくないと評しえよう。

以上を要するに、『類題集』の「公事」部に収載される例歌の内容は、南北朝期に成立の『年中行事歌合』を基幹として、『元弘立后屏風和歌』『新葉集』などの南朝方の歌集のグループ、次いで、院政期に成立をみた『永久百集』『為忠家百首』のグループ、次いで、新古今時代の『六百番歌合』『明日香井集』『拾玉集』『後鳥羽院御集』『拾遺愚草』『玉吟集』などのグループ、次いで、『宝治百首』『白河殿七百首』『続後撰集』『続古今集』『為家集』

などの後嵯峨院時代のグループ、最後に、『雪玉集』『三光院詠』『雅世卿集』『続撰吟集』などの室町期に成立をみた歌集のグループなどに、便宜的には分類される、院政期から室町期にいたる歌集などからの採録歌であって、各々の詠歌作者は、基本的には、当該各歌集に収載される代表的歌人であると言えるか。

五 おわりに

以上、『類題集』の「公事」部を検討した結果、『類題集』がはじめて「公事」部を設けた『題林愚抄』に依拠しながらも、歌題および例歌の面で、各々、『類題集』の誤謬を訂正したり、増補したりなどして、より一層整備された完璧な「公事」部を有する類題集の完成を目指して、鋭意編纂に努力していたらしい『類題集』の編集過程をある程度明らかにすることができたが、なお、完璧は期しがたいと言わねばなるまい。

ちなみに、靈元院の命により、武者小路実陰・烏丸光栄・三条西公福などがその編纂に関与した『新類題和歌集』は、「公事」部の歌題としてほぼ『類題集』のそれを採録しているので、この点からも、いかに『類題集』の「公事」部が整備された内容を有する類題集であるかが証明されようが、しかし、その一方、『新類題集』は『類題集』を継承し、例歌の面でいかなる新機軸を打ち出しているのか、等々の検討はなお避けて通れない課題であろう。しかし、これらの問題は拙稿『『新類題和歌集』の成立——「公事」部の視点から——』（『光華日本文学』第二号、平成六・七）に譲ることにして、一応の結論を出したいまは、擱筆することにしたと思う。